



★ ユニバーサル社会の 実現のために

障がいのある人たちと共に楽しむ自然体験活動を通して

野口和行 (慶應義塾大学体育研究所准教授)

はじめに

私と「障がいのある人たち」との最初の出会いは、小学5年生の時でした。私のクラスに聾学校から1人の女の子が転校してきました。娘をぜひ普通学級で勉強させたいという保護者の方の強い意向だったそうです。そんな友達を迎える私たちは、やはり少し緊張していました。しかし、そんな緊張もいつの間にか解け、特に女の子たちはすぐに仲良くなっていました。3ヶ月を過ぎる頃には口話（口の形で言葉を読み取るコミュニケーションの方法）で声を出さずに楽しそうに会話を楽しんでいました。それから1年半あまり、私たちは、時にはけんかもする「普通の」クラスメイトでありました。

次の出会いはキャンプです。大学で野外教育を専攻し、野外に関する仕事を始めた頃、障がいのある人たちと余暇として野外活動を楽しむための講座を担当してほしいという依頼がありました。野外教育に関する勉強は一通りしてきましたが、「障がいのある人たち」について学んだことがありません。ちょうど折良く淑徳大学で障がいのある人たちとのキャンプを始めるということを聞きつけ、仲間に加えてもらうことにしました。その後15年近くにわたって続けてきた障がいのある人たちとのキャンプの中で、私はたくさんのことを学びました。

2009年から2年間、在外研究の機会を得て、アメリカで野外教育に関する研究と研修を積み重ねて頂くことになりました。私が訪問研究員として籍を置くことになったノースカロライナ州立大学があるノースカロライナ州は、TEACCH（ティーチ）と呼ばれる自閉症のある人たちが、生涯にわたり地域に根ざした生活ができるようになるための包括的な援助プログラムで知られています。アメリカでの経験が、「私と障がいのある人たち」との第3の出会いとなりました。

本稿ではそんな第3の出会いを紹介しながら、私が考える「これからの自然体験

活動」について考えていきたいと思います。

○ 外傷性脳損傷のある人たちと楽しむ冒険プログラム

コロラド州にあるブリッケンリッジ野外教育センター（Breckenridge Outdoor Education Center、以下BOEC）は、障がい者を対象とした野外教育団体として1976年に設立されました。BOECは、視覚障がい者を対象としたクロスカントリースキーの指導から始まり、ロープスコース、ロッククライミング、カヌー、ラフティング、アダプティブスキー（特殊な器具やサポートを使用するスキー）などの冒険プログラムを提供しています。

私は、2009年8月に行われた外傷性脳損傷のある成人を対象とした5泊6日のプログラムに、ボランティアスタッフとして参加する機会をいただきました。

外傷性脳損傷は、交通事故等で頭部に物理的な衝撃が加わることによって、脳が傷ついたり、出血を起こしたりすることをいいます。脳の損傷によって起こる症状は、半身のマヒや感覚障がいなどがあります。また、記憶障がい、失語症、遂行機能障がい（計画的に行動をとることができなくなる）などの高次脳機能障がいが見られることもあります。

私が参加したアウトドア・アドベンチャー・プログラム（Outdoor Adventure Program、以下OAP）は、コロラド脳損傷協会（Brain Injury Association of Colorado）がBOECに指導を委託し、5泊6日の日程でハンドサイクリング、ラフティング、ロープスコースなどの冒険プログラムを行います。プログラム期間中は参加者1名に対して1名のボランティアがつき、共にプログラムを体験しながら必要な支援を行います。その他に各グループの支援をするスタッフ、プログラムを指導するスタッフ、全体を統括するディレクターでプログラムを運営していきます。

どのプログラムもキャンパーの個性に応じたさまざまな工夫がされています。ハンドサイクリングでは、通常の自転車の他に、3輪で安定した姿勢でこぐことができるもの、3輪で足の代わりに手でペダルをこぐものなど、さまざまなタイプの自転車が用意されています。キャン



⇨ ラフティングを楽しむ（BOEC）

パーはその中から自分が乗りたいものをチョイスすることができます。ラフティングは四肢にマヒがある人でもシートなどを工夫することによって、急流を下るスリルを味わうことができます。

BOECには車いすでも利用できるロープスコースがあります。リピーターが多いこのプログラムでは、キャンパー1人1人がロープスコースに対する目標を持ち、スタッフのサポートを受けながらロープスコースにチャレンジします。あるキャンパーは普段車いすを使用しています。今回の目標は車いすを使わずにロープスコースを渡ること、上半身の力を振り絞ってロープを持ち体を支え、ゆっくり足を動かしていきます。それを数名のスタッフでサポートします。自分で目標を決めてチャレンジする人たちの姿は、私に多くのことを考えさせてくれました。



◆ 車いすを降りロープスコースに挑戦

(BOEC)

○ 自閉症のある人たちと楽しむサマーキャンプ

キャンプ・ロイヤル (Camp Royall) は、ノースカロライナ自閉症協会 (Autism Society of North Carolina、以下 ASNC) によって、1997年に設立された自閉症のある人たちのための専用キャンプ場です。ASNCは1970年に自閉症のある子を持つ親たちによってNPOとして登録された団体で、自閉症のある人とその親に対してさまざまなサービスや支援の提供を目的とした団体です。

自閉症のある人を対象としたサマーキャンプは、ASNCが提供した最初のサービスとして1972年に始まりました。自閉症の人たちを対象としたサマーキャンプとしては、世界で最も大きく、歴史があります。このサマーキャンプは、6月上旬から月上旬までの約2ヶ月の間に、4歳児から大人までを対象にして、参加者の年齢や個性に応じたグループをつくり、5泊6日のプログラムを10コース実施します。

キャンプ場は、ノースカロライナ州の州都ローリーから車で30分ほどの場所にある133エーカー (約538,000㎡) の広大な土地に、30名が宿泊できる車いす対応の4棟のキャビン、100人収容の食堂、体育館、クラフト等を行うアクティビティ・センター、大きなグラウンド、プール、池などが配置されています。このキャンプ場

を中心に、水泳、ボート、ハイキング、クラフト、フィールド・ゲーム、キャンプファイヤーなど伝統的なサマーキャンプのプログラムが行われています。

キャンパーと直接関わるカウンセラーは、キャンパーの障がいの程度に応じて1対1人または2人のキャンパーを支援します。カウンセラーは特別支援教育や心理学専攻の大学生が中心で、キャンプ前に1週間のスタッフ・トレーニングで自閉症の専門家からキャンパーとの関わり方などを学び、10週間にわたる長いキャンプに臨みます。

キャンプ中のプログラムやキャビンでの生活場面においては、自閉症の特性を考慮して、絵や簡単な単語の組み合わせで視覚的に理解できるよう表現されたコミュニケーションカード、スケジュール表などを取り入れ、キャンパーがさまざまな活動や生活にスムーズに入れるような工夫がされていました。

キャンプに先立つ1週間のスタッフ・トレーニングと、私が参加した5週にわたるさまざまな年齢や個性のある人たちのキャンプは、私にとって本当に大きな「出会い」となりました。

○ 自閉症のある人たちと楽しむ冒険プログラムを取り入れたサマーキャンプ

ペンシルバニア州にある障がいのある子どもたちのためのキャンプを行う団体であるドラゴンフライ・フォレスト (Dragonfly Forest) では、私立学校の施設を夏の間借用して、自閉症やぜんそく、血液に関する疾病などさまざまな障がいや疾病のある子どもたちを対象としたサマーキャンプを実施しています。

2010年は、3泊4日の宿泊型キャンプと通いのデイキャンプを併せて5セッション実施しました。私は、自閉症のある子どもたちを対象とした4日間の通いのデイキャンプに参加する機会を得ました。

子どもたちは9:30から10:00の間に親の送迎で施設までやってきます。子ども1名につき大学生1名がカウンセラーとして付き、一緒に活動しながらさまざまな支援を行います。毎日スケジュールが決められており、午前中は年齢に応じて5~10名程度に分けられたグループごとに、カヌー、アーチェリー、野外ゲーム、クラフト、水泳、クラフト、ロープスコースなどの活動に参加します。午後はグループにこだわらず、子どもたちが、宝探し、縄跳び、お絵かき、紙飛行機作り、鬼ごっこなどの活動を選択して行います。

ロープコースは学校所有のもので、10のハイコースと12のローコースがあります。学校でディレクターを雇い、授業期間中は、学校の生徒を対象にしたチーム・ビルディングのプログラムを、週末や休み期間中は外部の団体を対象にプログラムも実施しています。ロープコースを体験するかどうかは、冒険プログラム実施の大原則である「チャレンジ・バイ・チョイス」、子どもたち1人1人が決めます。中にはコースの途中で「おりる」と言い出す子どももいますが、大学生のファシリテーターは、「すごいなあ、あの高さまで登ったんだよ」などのポジティブな言葉かけをします。

私が見た一番印象的な光景は、小学校低学年の女の子2人が「ジャイアント・ラダー」という大きな縄ばしご登りにチャレンジしている様子でした。2人は姉妹でそれぞれ発達に個性があります。2人がお互いに体を押ししたり、腕を引っ張ったりしながら大きな縄ばしごを登っていく様子に、子どもたちが持つ大きな可能性を感じることができました。



◆ 2人で協力してジャイアント・ラダーを登る
(ドラゴンフライ・フォレスト)

○ アメリカから学んだこと

キャンプは、子どもたちが日常を離れて、他のキャンパーやカウンセラーと生活を共にしながら、学校や家庭とは違うさまざまな体験を通して人間的な成長や学びを得る貴重な機会として、アメリカの文化の中に根付いています。また、移民国家であるアメリカには、過去に人種、肌の色、宗教、性別、出身国などによる差別を乗り越えて、さまざまな人々が市民権を獲得してきたという歴史があります。これは障がいに関する考え方にも共通していて、障がいの有無に関わらず、全ての人は平等で、機会の平等が保証されることが前提となり、障がいのある人には個別のニーズに応じた適切な支援がされなければならないことが、「障がいのあるアメリカ人法」、「障がい児教育法」などの法律で定められています。

これらの法律により、障がいのある子どもは、本人または親が望めば、全ての野外教育プログラムに参加できるようになりました。公立学校においては、障がいの有無に関わらず、適切な支援のもとに、障がいのある子どもを可能な限り普通学級

で教育していこうというインクルーシブ教育を目指す動きが増えてきました。それに伴い、野外教育の世界でも、障がいの有無に関わらず、特別な配慮や条件整備のもとで一緒に生活しながらさまざまな活動を行うインクルーシブ・キャンプを積極的に実施していこうという動きも広がってきています。

その一方で、上にあげたような特定の障がいのある人たちを対象としたスペシャル・ニーズ・プログラムの重要性も再認識されています。スペシャル・ニーズ・プログラムは、対象を十分に理解し、トレーニングを受けた指導者が、アクセシブルな施設や用具を使用して、障がいの程度やニーズにきめ細かく対応してプログラムを実施することができます。また、特定の障がいのある参加者が、プログラムを通じてお互いに支援し合うことのできる仲間を作り、通常的生活で感じる孤立した感情から開放され、自信や自立、自己の新たな可能性の気づき等の効果もあることがわかってきています。

○ 「楽しむこと」と「チャレンジすること」

BOECは、障がいのある人を対象とした野外・冒険教育プログラムの提供に目的を特化し、年間で約2,000人以上の参加者を集めています。これは、それだけ多くの人たちが自然の中での活動を求めていることを意味しています。

ASNCを設立した親たちが最初に行った事業、それがサマーキャンプでした。これは、障がいの有無に関わらず、キャンプが子どもの成長に重要な役割を果たすという共通認識があることを意味しています。

キャンプ・ロイヤルのサマーキャンプに先立ってカウンセラーを対象に行われるスタッフ・トレーニングで、とても印象的な言葉を聞きました。学生時代にキャンプ・ロイヤルでカウンセラーをし、現在は自閉症のある幼児を対象としたプレスクールという教室で教師をしているスタッフの言葉です。このキャンプでどんな療育（障がいのある子どもが社会的に自立することを目的として行われる医療と教育）を目指すのかという質問に対する答えです。

「療育は私の仕事ですが、彼らにもレジャー・楽しむための時間が必要です。キャンプは彼らが思いきり楽しむ場所で、療育の場所ではありません。」

スタッフ・トレーニングの中では、キャンプに10年以上参加しているキャンパーたちからそれぞれにとってのキャンプの意味を聞くことができました。彼らは幼少期にどのような環境で育ってきたか、学校でどのような困難があったか、そして、

どれだけこのキャンプを楽しみにしているかを一生懸命語ってくれました。あるキャンパーはこう言いました。

「キャンプ・ロイヤルは世界で一番楽しい場所だ。」

車いすの参加者が毎年目標を決めてロープコースに取り組んでいる BOEC のプログラム、自閉症のある子どもたちが丸太渡りや縄ばしご登りに取り組むドラゴンフライ・フォレストのプログラム、自らの意志で課題にチャレンジする姿には、障がいはい関係ありませんでした。プログラムを提供する側の工夫や、適切な条件整備＝プログラムを提供する側のチャレンジによって乗り越えることができることを学びました。

ドラゴンフライ・フォレストのディレクターは私にこう語ってくれました。

「私がキャンプのスタッフ・トレーニングで大切にしていることは、キャンプという環境の中で、子どもとカウンセラーがお互いに影響を与えながら育っていくというキャンプの文化を伝えることです。」

障がいのある人たちにも、学校や仕事、施設等で過ごす日常の体験があります。しかし、キャンプというスペシャルな体験も彼らの成長に必要であることをアメリカで実感することができました。

障がいの有無に関わらず、人は、安心感の持てる環境の中で生活の質 (Quality of Life) を高めていくことが大切です。そして、生活の質を高めるためには、「やればできる」という実感を持てることが重要となります。「やればできる」という感覚は、みんなと同じものでなくともよく、年齢相応のものでなくともよい、そして、それは特定の限られたものでもよいのです。それらの小さな成功体験の積み重ねが自己効力感を高め、生活の質を高めることにつながっていきます。

自然の中での体験は、楽しい時間であると同時に、「普段と同じ活動」と「普段とは違う特別な活動」を、参加者 1 人 1 人の個性に応じた工夫や配慮をしながら提供することで、参加者が自分の意志でチャレンジする機会を作ることができます。そして、小さな成功体験や達成感を積み重ねることが、生活の質を高めるきっかけとなる貴重な機会となり、障がいのある人たちの生きる世界を広げていくことにつながることを強く感じました。

○ 発達障がいのある子どもたちを対象としたサマーキャンプの実践

アメリカでの経験を通して、これから自分が自然体験を通して伝えていきたいことがはっきり見えてきました。それは、障がいの有無に関わらず全ての人々に、

①自然の中で遊ぶ楽しさと、②自然の中での冒険と挑戦を、③それぞれの個性に合わせたチョイス（選択）する体験を提供しながら、④人にはさまざまな個性があることを社会に広く伝えていきたい、ということでした。

そこで、発達障がいのある小学4年～中学3年の子どもたち16名を対象とした3泊4日のキャンプを始めることにしました。それがプチ冒険倶楽部サマーキャンプです。2011年から始めたこのサマーキャンプは、発達障がいのある子どもたちに以下のような体験を提供することを目的としています。

(1) 自然の中で、自然を楽しむためのプログラムを行います。

森の中を歩き、草原を走り、川で遊び、自然の素材を使って工作をする…自然の中で、自然を五感で楽しむプログラムをたくさん用意します。

(2) キャンパー1人1人の興味に応じたバラエティ豊かなプログラムを用意します。

キャンパーが自分の興味にあったプログラムに参加できるように、バラエティ豊かなプログラムを用意し、キャンパーが選択できるようにします。

(3) キャンパー1人1人のニーズに応じたサポートをします。

キャンパーがスムーズにキャンプでの生活や活動に適應できるように、1対1でスタッフがサポートし、キャンパーのニーズに応じて、スケジュールや活動の場の工夫をします。

(4) 冒険プログラムを取り入れ、キャンパーがチャレンジする機会を提供します。

キャンパー1人1人が自分の意志でチャレンジする機会を提供します。2011年と2012年はロープスコースのプログラム、2013年はカヌー・カヤック体験のプログラムを行いました。

キャンプの実施にあたっては、キャンプ・自然体験活動の専門家と発達障がいのある子どもの支援に関する専門家がチームを組んで企画と運営を行っています。また、発達障がいに関する理解や支援の方法を学んだ大学生がキャンパーと1対1でキャンパーの生活と活動を支援します。冒険プログラムの実施にあたっては、専門のインストラクターの指導の下で、万全の安全対策を講じています。

私たちにとってもチャレンジであったこのキャンプ、ふたを開けてみると私たちの想像をはるかに超えた子どもたちのチャレンジする姿を見ることができました。

初めての年にロープスコースにチャレンジした小学4年生のA君、2本のハンドロープを支えにしながら、高さ8mほどの高さにあるフットケーブルの上を歩いて移動する「つり橋わたれ」というコースにチャレンジしました。なんとか8mの高さまで登りましたが、足をかけるべきケーブルを両手でつかんでしまいました。確

保用のロープで結ばれているので安全は確保されていますが、高さへの恐怖からどうしても手を離すことができません。しばらく葛藤していましたが、何とか手をはなして無事おりにてくることができました。しかし、A君はとても悔しかったのでしょうか。自分の気持ちを言葉で伝えることはできないのですが、涙を流しながら大学生のパートナーの手を引っ張って、もう一度チャレンジしたいとアピールするのです。もうキャンプ場へ帰る時間の間際であったため、チャレンジさせることはできませんでしたが、A君の気持ちは私たちに痛いほど伝わってきました。

中学1年のB君、1年目のロープコースでクライミング・タワーにチャレンジしましたが、自分の思ったように登ることができず、悔しい思いをしました。2年目は「最後まであきらめない」という決意でロープコースに臨み、2回目のチャレンジで自分が決めた目標の地点まで登りきることができました。



◆ ロープコースにチャレンジ
(プチ冒険倶楽部)

○ ユニバーサル社会の実現のために

2020年に東京でオリンピック・パラリンピックが開催されることが決まりました。スポーツを愛する者として、世界中からたくさんのアスリートとゲストをお迎えしてスポーツの祭典が開かれることを大変うれしく思っています。そのために私たちはどんな準備ができるでしょうか。

私は、人種、国籍、性別、年齢、障がいの有無などを問わないユニバーサル社会の実現が大切であると思います。前述したように、障がいの有無に関わらず、誰もが得意なところと苦手なところを持っています。それは「個性」の大事な側面のひとつだと思います。苦手なところを克服していく、という考え方もありますが、それ自体が困難であることもたくさんあります。例えば、段差のある道路などは、車いすを使用している人にとっては1人では越えることのできない壁となります。しかし、苦手なところを助けるための工夫や支援（道路の段差をなくす、点字ブロックを設置する、視覚的に理解が可能なピクトグラムによる表示など）によってその壁は乗り越えることができます。また、社会の人々が、障がいに対する正しい理解

を深めていくことも重要な要素になります。そのことは、言い換えれば、同じ社会を構成する人々が、それぞれの個性を理解し、尊重し、多様性を認めるということです。障がいのある人々が快適に暮らすことができる社会は、誰にとっても快適な社会であり、世界中から集まってくるアスリートやゲストにとっても深い印象を残すことができると思います。

もうひとつアメリカで体験したことを紹介します。キャンプ・ロイヤルのカウンセラーは特別支援教育や心理学専攻の大学生が中心だと書きましたが、中には自閉症のある子どもと接するのが初めて

という学生もいます。その1人に、なぜカウンセラーを志望したのか聞いたところ、「これは自分にとってのチャレンジだ」と答えてくれました。彼は喜怒哀楽をはっきり示すようなタイプではなく、私は「彼はキャンプを楽しんでいるのだろうか」と心配しながら見守っていました。しかし、その秋にASNCが主催する別のイベントに参加したとき、再びボランティアとして参加していた彼と出会ったのです。彼と再開を喜び合いながら、彼のチャレンジが実を結び始めていることを感じました。

障がいのある人たちとのキャンプの経験を通して、ボランティアの学生たちも確実に成長していきます。それだけでなく、キャンプを通して彼らは障がいという「個性」のよき理解者となり、さまざまな障がいという「個性」が社会の中で受け入れられていく土台となることを感じました。

日常から離れて、自然の中で共に生活し共に活動するという経験を通して、障がいの有無に関わらず、お互いの個性を認め合い、相互作用を深め、信頼関係が構築されていきます。その積み重ねが、将来私たちが目指すべきユニバーサル社会の実現への大きな力となっていくことを信じています。



◆ 全員の歌とゲームからキャンプが始まる。
(キャンプ・ロイヤル)

* 著者プロフィール

野口 和行 (のぐち かずゆき) 1967年東京生まれ。東京学芸大学大学院教育学研究科修士課程修了(野外活動・レクリエーション)。慶應義塾大学体育研究所助手を経て2012年より慶應義塾大学体育研究所准教授。2009年から2011年までノースカロライナ州立大学訪問研究員。